

令和元年6月11日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H06510

研究課題名(和文) 移民子弟のホスト社会への参加に関する人類学的研究 - 日本とブラジルを事例に

研究課題名(英文) Anthropological study on the process of social participation among children of immigrants in their host country: Japan and Brazil

研究代表者

佐藤 悦子 (SATO, Etsuko)

東北大学・教育学研究科・博士研究員

研究者番号：70749415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、移民子弟のホスト社会への参加過程を明らかにするために、日本とブラジルでのフィールドワークを通して、ホスト社会の主流文化や集団とのかかわりにおいてどのような日系子弟の生活世界が広がっているのかを探求した。100年以上前に日本からブラジルへ渡った日本移民の子弟たちや現在の日本に暮らす日系ブラジル人たちは、自文化・自己や異文化・他者を再解釈することで、移民コミュニティへ参加したり(あるいは参加を拒否したり)、ホスト社会やその文化との関係性を紡いだりすることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ホスト社会の主流文化とどのように関わっていったのかという面を具体的に跡づけることで、多文化共生について、移民の側から見た主流文化のハードルの高さを考慮に入れた新たな議論を展開していくことができる。また、現在検討されている外国人労働者の受入れに関する課題や文化が異なる人々への教育のあり方について示唆を与えると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the process of social participation among children of Japanese immigrants in their host country by focusing on how the lifestyles of Japanese immigrant's descendants appear in terms of their social interaction with the mainstream of culture and group of locals in their host country through some field work between Japan and Brazil. Children of the Japanese immigrants whose parents migrated to Brazil more than one hundred years ago and Japanese Brazilians who currently reside in Japan have revealed their ways to blend in (or to discord) a community of immigrants and to build relationships in the society of the host country and its cultures by reinterpreting not only their own cultures and themselves, but also other cultures and people that differ from theirs.

研究分野：教育人類学

キーワード：移民 ブラジル 日本 社会参加 日系ブラジル人 コミュニティ ライフヒストリー 生活世界

### 1. 研究開始当初の背景

1908年以降、ブラジル日系移民は出稼ぎ主義の農業移民として異国の地へと渡った。彼らは自らの文化を保持しつつもブラジル社会の主流文化を取得し、ホスト社会で中間マイノリティとして活躍してきた。こうした背景には、日系コミュニティ内における旧中産階級と新中産階級の分化と協力がある。60年代からブラジル日系人の丹念な調査研究を行った前山隆によると、きょうだい間の年長者は親と共に「労働する」ことで経済的基盤を確保し、年少者の「勉強する」ことでブラジル社会の中で社会的威信を獲得したという。この分化と協力の関係が家族全体を移住先であるブラジルでの社会上昇を果たす戦略として機能したと論じた(前山1996)。この社会上昇戦略では、教育と宗教との関係は重要な要素として位置づけられた。しかしながら、これまでの研究では仏教や神道など日本文化に焦点が当てられ、ブラジルの主流文化であるカトリックについては十分に議論されてこなかった。研究代表者である佐藤は、これまでブラジルで日系移民のカトリック共同体に着目し、継続的に調査研究を行ってきた。そうした調査から、かつての日系移民のカトリックの布教の場では、本国日本で重視された修身教育の再解釈が大きな役割を演じていたことを明らかにした(佐藤2010)。このブラジル日系移民のカトリックへの文化的構造変化をブラジルで生まれ育った子弟たちはどのように捉えて、ブラジル社会へと参加、活躍してきたのだろうか。本研究は、こうした問いへの探求を目指した。

一方、1990年頃から、ブラジル日系移民の子弟の中には、斡旋業者を介してデカセギ労働者として日本へ再び渡る人々が現れた。彼らの多くは愛知や静岡を中心とした中部地方などの工業地帯に集住し、自動車や電気工業の分野における非正規雇用での不安的な就労形態に置かれた。こうした在日ブラジル人に関しては、90年代初めの頃から労働や教育などをテーマとした研究成果が積み上げられてきた。こうした研究は主に2つの立場で論じてきた。一つは、在日ブラジル人が流動的で周囲の日本人から認知されない存在であり、ホスト社会で社会上昇が困難な状況を日本の社会経済的な構造の問題として捉える。もう一つは、在日ブラジル人は定住化する市民であり、文化的資源の有無など個の問題として捉える立場である。これらの立場は在日ブラジル人を巡って現代の日本社会における「問題」として捉え、「問題」が生じるメカニズムの解明と解決に向けた提言がなされてきた。移住先である日本社会の主流文化や集団との間に存在する相克や課題に着目する一方で、ステレオタイプの語りや移民の主体的な動きを見落としたりする危険性があった。また、かつての日本からブラジルへの移住という歴史的経過を踏まえた検討とはいいたい。

こうしたことから、本研究では、ブラジルと日本を調査地として、ブラジル日系移民とその子弟による移住先の主流文化や集団にかかわりに着目し、移民はどのようにホスト社会へ参加するのかを明らかにする。

### 2. 研究の目的

本研究は、ブラジルと日本における移民のホスト社会の主流文化とのかかわりを明らかにすることで、移民子弟のホスト社会への参加過程を探求することを目的とする。移民子弟のホスト社会の主流文化や集団とのかかわりに関して、どのような文化的文脈で、どのような経験を積んでいるのか。100年以上前に日本からブラジルへ渡った日系移民の子弟たちと、現在の日本に暮らす日系ブラジル人を対象に、国内外でのフィールドワークを通して、彼らの生活世界を探る。その上で、上記の両社会における移民のホスト社会の主流文化とのかかわりの比較分析を行い、トランスナショナルな移民のホスト社会への参加過程について多角的視点で考察することを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究では、主に文化人類学的なフィールドワークを行った。研究代表者は、これまでの国内外における調査研究を通して調査対象者と信頼関係を構築してきた。こうした人々への丹念なライフヒストリーの聞き取り調査や参与観察、資料収集を実施した。具体的には、以下の点に注目し、調査を行った。

(1) ブラジルにおける日系子弟の生活世界：過去にさかのぼり、ブラジル主流文化であるカトリック(またはキリスト教)とのかかわりに関して、ブラジルの日系子弟の生活世界がどのように構築されていたのかを探る。特に、布教活動が活発化した40~50年代の日常生活の様相や彼らを取り巻く状況に着目する。

(2) ブラジル日系移民の子弟教育に関する語り：日系子弟は自らの受けてきた「教育」についていかにして語るのかを探る。このような語りの分析を通して、彼らの教育経験や生活世界をより鮮明にし、ブラジル日系社会全体における移民の文化的構造の変容プロセスや社会参加プロセスに位置づける。

(3) 子どもの就学と日本の文化や集団との関係：日本の学校を通して、在日日系ブラジル人は日本人や日本文化とどのようにかかわり、どのような教育経験を積んできたのかを浮き彫りにする。

(4) トランスナショナルな在日日系ブラジル人の子どもの生活世界：現在、家庭や教会、習い事などのインフォーマルな教育の場を包括した多様な「教育」の場に参加する日系ブラジル人の子どもの生活世界を探る。

ブラジルでの現地調査では、日系二世を中心とした移民子弟のライフヒストリーの語りや日誌等の史料の収集は、彼らの高齢化や不在に伴い困難な場合もあったが、予定していなかった複数の日系組織での調査を行うことができた。また、日本での現地調査はこれまで実施してきた予備調査を踏まえ静岡県を選定したが、他地域での移民女性の地域社会への参加や子育ての実態を参照するため、当初予定していなかった東北地方での調査も行った。

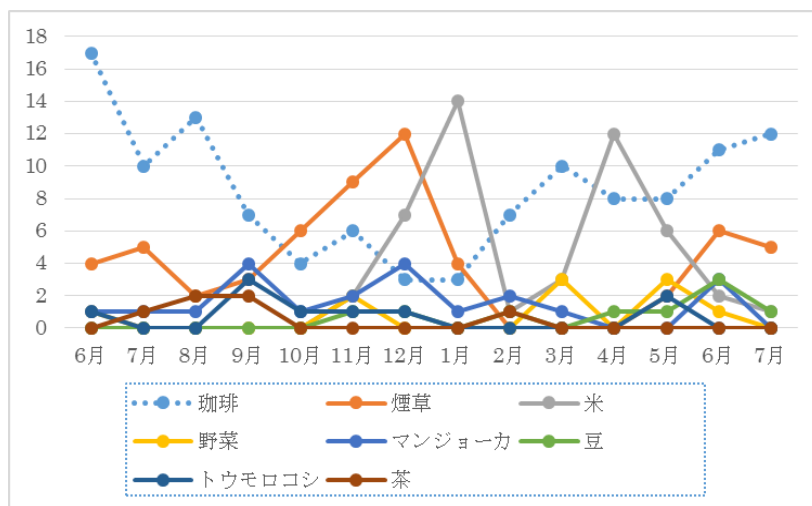
#### 4. 研究成果

研究1年目には、主にブラジルでの現地調査において日系二世のライフヒストリーの語りや史料の収集と日系カトリック共同体を中心とした複数の日系組織での参与観察を行った。時代やライフステージに応じたブラジル社会や日系コミュニティへの参加のあり方とその変容が浮き彫りになった。

(1) ブラジル日系社会において教育(特に大学などの高等教育)は社会上昇のための戦略として重要な役割を果たした。しかし、日系二世、三世の女性たちの多くは、十分な教育が受けられなかったと認識している。当時の一世である親たち(特に父親)の女子教育に関する一般的な考え方では、結婚や出産、育児という女性のライフステージが重視され、ブラジルでの学校教育(特に高等教育)は必要ないとされていた。一方で、親たちは女性にとって裁縫や料理、生け花などの習得は必要であると、経済的に余裕がある家庭では娘たちを家政学校や花嫁学校に入学させた。こうして一世たちの限定的な価値観の中で1930年代頃から日系社会では家政学校や花嫁学校、裁縫学校が女子教育の中核となっていった。例えば、ある日系修道会は1939年以降、日系子弟を対象にした家政学校と裁縫学校を設立した。遠方からの生徒も多く、寄宿舎が併設された。そこでは、日本的な良妻賢母が再解釈されることで、カトリックの宗教教育も含めた女子教育が行われた。というのも、北海道で布教活動を行っていた創立者のドイツ人司祭は、当時の日本女性の「8人の子どもを育てるくらいの勇気と力」をもつ姿に感動し、ブラジルでも彼女たちのような日本人の伝道婦たちによって宗教教育や女子教育に従事させようと考えたからであった。しかしながら、1960年頃から家政学校は相次いで閉鎖され、その一方でタイプライター学校が開設された。このように、移民コミュニティにおいても時代の変化に応じてブラジル社会において移民女性が経済的に自立できるための女子教育へと転換されていた。

(2) 1950年頃の日系入植地であるレジストロ(ブラジル・サンパウロ州)のある集落では青年たちによって循環日誌が記述された。循環日誌は単に日々の記録だけではなく、日本語教育の一環という意味も含まれていた。日誌の分析からは当時の青年たちのおおよその生活世界を窺い知ることができる。レジストロの青年会のメンバーたちは、中心的な労働の担い手として農業に従事し、野球や陸上などスポーツを通して戦後の日系共同体を盛り上げてきた。

1950年当時のレジストロの青年たちが従事した農作業は主にコーヒー栽培と煙草、稲米に関わる作業であることがわかる(図表1参照)。また、青年会の共同作業が実施され、多くの労働力が必要とされる広大な土地の除草作業や収穫作業に青年たちが地区の各家庭に巡回動員された。一方で、こうした青年会の共同作業の中で、ブラジルで生まれ育つ日系二世



図表1 農作業の日誌記載数(農作物別)

の青年たちは、一世を中心とした日系社会の構成員として組み込まれる過程において葛藤を抱えつつ、個別の相互扶助的な関係性を構築していた。このような青年間の相互扶助には、「カマラーダ」と呼ばれる日雇い労働者(非日系であり、日誌の中で個人名が記されることはない)が労働力として提供されることもあった。カマラーダは日系青年の代わりに労働するものであり、当時の青年間の関係性において時に非日系人の労働力として代替可能な「緩やかな共同性」が存在していたと考えられる。つまり、カマラーダを自己の代替可能な他者として解釈することで非日系ブラジル人との関係性を紡ぎ出し、日系コミュニティへ参加していたことを物語るという。

(3) 現在、高齢となった日系二世にとって、日系組織への参加の度合いは増している。例えば、

ある女性は、定年退職後に母親も参加していた日系人のカトリック系グループの集会に参加したり、日系修道会でボランティアをしたりと、働いていた頃（壮年期）に比べて日系コミュニティに参加することがより頻繁になった。また、老人会や商工会、婦人会など日系コミュニティでは、ダンスやコーラス、書道、民謡、舞踊、日本語などさまざまな講座が開催され、老年期の余暇を過ごす場も多く提供されている。このように、現役時代にブラジル社会の発展を支えてきた日系の移民子弟たちは、老年期を迎えた今、日系社会の構成員としてのつながりを再活性化させていると考えられる。今後は、具体的に、ブラジルの経済的発展に貢献してきた日系子弟がどのように日系社会での関係性を再構築しつつ、ブラジル社会でこうした姿がどのように認知されていくのかを検討したい。次の事例はこうした検討を可能にすると思われる。前出した日系のカトリックグループはイエズス会が運営する学校（この学校はもともと日系子弟のために設立された）で長年集会を開催してきたが、近年は薄暗く改修もされない地下室へと追いやられていた。しかし、一昨年学校が寄付された土地を使用できる条件がこのグループの存続であることが明らかになり、このグループを取りまく環境は大きく変化している。

研究2年目には、静岡県内のカトリック教会や学校等において参与観察及び関係者への聞き取り調査を行った。また、日本で幼少期から育ったブラジル人（ここでは移民第2世代と呼ぶ）への丹念なライフストーリーの聞き取り調査を行った。先行研究で指摘されてきた労働や教育、移住形態に関する社会的環境は変容しつつあることが浮き彫りになった。

(1) 1990年の入国管理法の改正以降、デカセギ目的で来日し不安定な状況に置かれてきた在日ブラジル人の中には家族を呼び寄せる人もいた。幼少期から日本で暮らす移民第2世代は、家庭では親たちとポルトガル語で会話し、多くのブラジル人が集まる教会に連れていかれたりする。日本の公立学校に入学すると急速に日本語を習得し、多くの日本人と接触することになる。こうしたアンビバレントな状況は、異文化を援用することで移民コミュニティへの参加を拒否するための正統な理由となった。例えば、ある日系三世の女性は、中学や高校では日曜日にも部活動が行われたため、父親から参加を強制されていた教会に行かずに済んだと語る。また、定時制の公立高校に入学したことで卒業後の進路は学校推薦で正規の仕事に就くことができた。そのため、他の在日ブラジル人たちが、どのように斡旋業者を介して職を得たり、外国人向けの求人に応募したりするのか、その方法を知らない。このように、日本で育った移民第2世代の中には移民コミュニティに周辺的にしか参加せず、他の在日ブラジル人と自らを差異化する人々が登場しつつある。今後はこうした在日ブラジル人の新たなアイデンティティを探求する必要がある。

(2) 現在、日本に定住するブラジル人たちは、移民第1世代から移民第2世代へと移行しつつある。90年代頃から来日した移民第1世代である親たちは、高齢となり、ブラジルへの帰国などで不在であることも多い。こうした状況は、日本で結婚や子育てのライフステージを迎える移民第2世代の実生活に大きく影響する。例えば、前出した女性は、両親が帰国し日本に不在であることから日本で仕事と育児を両立するための協力者が家族内で得ることが困難な子育て環境であった。しかし、娘（移民第3世代）と自文化であるカトリックにおいて儀礼的親子関係にある年配のブラジル人女性（代母）から保育園の送迎など育児のサポートを得ることもあった。このようなことから、単なる同じ信仰をもつ人々という関係性ではなく、移民コミュニティ内で疑似的な親族関係を再構築することで、日本で子育てと仕事を両立する女性にとって不利な状況をカバーしていることが考えられる。

<引用文献>

前山隆『エスニシティとブラジル日系人』御茶ノ水書房、1996

佐藤悦子「ブラジル日本移民による『修身』の再解釈 - カトリックの布教活動を事例に」『教育思想』第37号、pp.77 - 88、2010

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

佐藤悦子、「越境する「良妻賢母」と女子教育 - ブラジル日系社会における伝道婦と家政学校に着目して」、『人文科学』、第24号、pp.27 - 43、2019、査読無

佐藤悦子、李仁子、佐藤寛貴、「東北地方における地方日本語教室に関する文化人類学的考察 - 日本人支援者の視点をもとに - 」、『東北大学大学院教育学研究科 研究年報』、第66集第2号、pp.1 - 16、2018、査読無

佐藤悦子、「循環日誌から見る日系二世たちの生活世界 - ブラジル・レジストロ市を事例に - 」、『教育思想』、第45号、pp.67 - 80、2018、査読無

佐藤悦子、「被災地における手しごとの場をめぐる関係性 - 宮崎市田老地区での支援に着目して」、『関係性の教育学』、第17巻、pp.41 - 50、2018、査読有

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。